

あらしのよるに

夕方から降りだした雨は、ますます激しさを増し、ワイパーをフル稼働させても視界不快指数100%。

帰路、俺たちの車は、中国自動車道から若狭舞鶴自動車道にはいった。

その途端、交通量は極端に減る。

「今日は、嫁さんがいないんだ」

懐もさびしく、くそ忙しい週末に悪友からの電話だ。

やつは、そんなときはいつもチョンガーで、かつ彼女もいないこの俺に白羽の矢を立てる。

やんわりと断ったが、押しの強いあいつと、断り下手の俺のパワーバランスでは、そのまんま街に繰り出すのは必然だった。

でも、よりによって、な、なんで130<sup>キロ</sup>も離れた大阪なん？

「ここ、うまいらしいで一回来てみたかったんや」

誘われるがまま心斎橋まで中華を食いに行った。食いたくもなかったが、料理がついからついから、くるわ、くるわ。

前回、こんな風に誘われたときは、やつのおごりだった。

食べたくもないのに来てやっているんだからおごってもらって当然。

それがなんで今日は割り勘なんっ！？

とはいえ、この心の叫びを口に出せるタイプではない俺は、言われるがままに、半分出す。

「あっ端数は俺だしくしな。」

15円。彼が気前よく俺より15円多く負担してくれた・・・。

「ああ、ありがと。」

すっかり財布はオケラに（悲）

土砂降りのなか、傘も差さず、帰路につくため駐車場にまっしぐらにむかった。

下戸の俺は当然運転手。大酒呑みのこいつは助手席にて爆睡。

おかしい！どう考えてもアンフェアだ！！

こいつの食事代+俺の食事代+こいつの大量のアルコール代+俺のウーロン茶2杯分。

これを2で割ってたとえ15円こやつが余分に出してくれたとしても、これは平等なのか、否！平等じゃない。

そのうえ15円多く出したことで、こやつは俺におごってやったという顔をしているではないか！？

「ああ～っ、むかつく～！！」

もう20分くらいは並走しているだろうか？

どうしようもない腹立たしい気持ちのなかで、俺は、ぴったりと張り付いて走行する後続の車に好感を持ちはじめていた。

こんなあらしのよるに同じようにヘッドライトを照らし、こんなうらさびしいところで同じスピードで、しかも同じ方向に車を運転している。

そう。運転している！！この共通点だけは譲れない。

隣で運転どころかアザラシの雄叫び？のようないびきをかいているこいつなんかよりもず

っとずっと親しみを感じるのだ。

この人も舞鶴の人かな？仕事は何をしているんだろう？もしかして同業者？

そんな風に考えるだけで、荒んだ気持ちが徐々に和らいできた。

それでも、ずっとずっと一緒にやんす。(なんちゃって)

いまのは、ガブとメイどっちの台詞だったっけ？

俺は、オオカミとヤギの物語を自分達に重ねたりしながら車を走らせた。

そして名も知らぬ後続車の運転手を「ガブ」と名づけた。

「行くぞ！ガブ！」

アクセルを踏んでみる。

やはり、ぴったりついてくる。おおっ！やっぱりガブとは一心同体だ（喜）

さらにアクセルを踏んだ！

「今度はもっと速いぞガブ！俺についてこれるか？」

俺が右足を強く踏み込み、車が加速したその瞬間だった。

ガブが突如変貌。牙を剥き出しにして、俺に襲いかかってきた。

張り付いていた車は、突然、車のボディをたたく雨音よりも大きなサイレンを鳴らしながら、俺を抜き去り、手際よく車を側道に止めるよう促した。

ガブは、闇夜でも判別できるいかつい顔で近寄ってきた。

「警察です」

「……………」

万事休す。ガブは、羊（この場合やっぱやぎとすべきか？）のお面を覆ったオカミ（公務

員) だったわけだ。

辛うじて免停は免れたものの、反則切符をきられ、髄液まですいとられた俺には、この先瀕死の生活が待っている。

一方助手席のつれは、この一連の悲しい出来事を何も知らないまま眠っている。

ひとり幸せそうな顔をして。

「ああ〜っ、むかつく〜っ!!!」

あまりにもアンフェアだ。

「神様っ! どんだけ〜っ!!!」

(おわり)

この物語はフィクションです